

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(76)

庭先を眺めれば、涼やかな風に乗ってトンボが飛び交い、秋の夜長に耳を澄ませば、鈴を転がすような虫の声が間近に響いてきます。私が住んでいる山里の集落にも、いよいよ秋がやって来ました。

とともに、お団子やお餅、旬の里芋や柿なども用意すれば、お月見の準備は万端です。ちなみに、十三夜のお団子は十三個（十五夜は十五個）、十五夜のお団子には餡を使うのに対して、十三夜には黄粉を用いる地方もあるようです。

雲消えし

秋の半の空よりも

月は今宵そ

名に負へりける

(西行「山家集」)

（雲のない八月十五夜の空よりも、今夜の十三夜の方がお月見にふさわしい名月であったよ）この和歌では「秋の半の空」（十五夜）と「今宵の月」（十三夜）とが対比され、十五夜の満月よりも、十三夜のほうが趣深いと詠っています。



高尾山にも秋がやってきました

歌の中に「名に負う」（名高い）と見えるように、十三夜を愛でる風習は、すでに平安時代には広まっていたのでしょうか。「十五夜に月なし、十三夜に曇りなし」とも言われます。すっきりしないこと多い十五夜よりも、晴れ渡る十三夜に秋を感じていたのかもしれない。

私たちは、全てが絶えまなく変化し続ける「無常」の世に生きているとはいえず、今年は無常というよりも「異常」の連続だったようです。

います。いつもの姿ではなく、「普段とは違ってしまった」ことに重きが置かれた言葉でしょう。日々の生活の中で、無常を感じることは心に潤いを与えてくれますが、異常な出来事を目の当たりにすることは、少しでも減ってほしいと念じます。

今、秋を迎えて過ぎ去った日々を思い返せば、この夏は地震に大雨、猛暑に台風と、多くの自然災害に見舞われました。

ところで、「無常」を訓読すると「つねなし」（常無し）となり、「変わりやすい」という意味になります。では、「異常」はどうでしょうか。江戸時代中期の中国語学習書『唐話纂要』には、異常は「ヨノツネナラズ」（世の常ならず）と記されて

世に残ってしまったなあ。自分が死んだ後に、見ることができなくなる秋の夜月のことを思うと）眼前の月は、満ち欠けを繰り返しながら、この世を照らし続けてきました。きっと私が知り得ない後の世の人々にも、同じように月の光は降り注ぐでしょう。何十年、何百年後の秋の景色に思いを馳せながら、秋の夜長を過ごしてみます。（栃木北部教区普濟寺）

側が少し欠けています。どちらかと言えば、円かなお月様の方が良いようにも思われるのですが、なぜ欠けた月に心惹かれるのでしょうか。

兼好法師（二二八三頃）

「二三五以後は、『徒然草』の中で次のように語っています。

桜は満開だけを、月は満月だけを鑑賞すべきだろうか。いや、それだけが全てではない。例えば、月を隠してしまっている雨を見つめながら月を恋しく思ったり、狭い部屋に閉じこもって、過ぎゆく春の行方を想像し

ながら過ごすのも味わい深い。花が咲き始めた頃の梢や、散って花びらが敷いている庭などにも見所がある。

「徒然草」二二七段

兼好は、満開や満月といった完全・完璧なものだけではない、「不完全な美しさ」にも目を向けました。頂点の前後にも美しさがあり、物事の始めから終わりまでの全てに価値があるという、言わば「始中終の美」とも言うべきものを説いているように思われます。兼好はさらに続け、千里の果てまで輝く満

月を眺めるよりも、夜明け近くになってやっと待っていた月が見えた時のほうが、月の青さが心に深く沁み渡ってくる。杉の木の梢に見える月光や、雨雲に隠れている月なども、この上なく素晴らしい。椎柴・白樫などの木の葉に光がきらめく時は身に沁みて、この風情を分かち合える友達が近くにいたらと思ひ、都が恋しくなってくる。

心で思い描くのも楽しくて味わいがある。

「徒然草」二二七段

兼好は、肉眼だけで見るのではなく、心眼で観ることの大切さを示しました。不完全なものを含む「無常の美」に、自ら鍛え上げられた心眼が加われば、この世はどんなにか美しく輝くでしょう。

思ひ置く

ことぞこの世に

残りける

見ざらむ後の

秋の夜の月

（兼好法師家集）



（栃木北部教区普濟寺）

北海道胆振東部地震の被災者の皆様に御見舞い申し上げます

九月六日に発生した大地震により被災された多くの皆様と御家族、関係者の皆様に謹んでお見舞い申し上げます、災害により犠牲となられた方々の御冥福を、心よりお祈り申し上げます。そして、一刻でも早い復興と、平安なる日々が訪れますようご祈念申し上げます。

大本山 高尾山 薬王院